

乙 第 号

青木久美子 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	乙第	号	氏名	青木久美子
論文審査担当者	委員長		教授	吉川 正英
	副委員長		教授	細井 裕司
	委員		教授	國安 弘基
	委員		教授	桐田 忠昭
	委員		特任教授	高木 都
		(指導教員)		

主論文

Possible peripheral mechanism for taste disorder in rats administered S-1

S-1 投与ラットにおける味覚障害の想定される末梢メカニズム

Kumiko Aoki, Koji Obata, Miyako Kurihara, Hiroki Kuniyasu,

Tadaaki Kirita, Miyako Takaki

International Journal of Clinical Oncology

2014年発行予定 2013 Jun 4. [Epub ahead of print]

論文審査の要旨

本研究は抗がん剤治療中に生じる味覚障害の発生機序の解明を目的として行われた。抗がん剤は臨床において多くのがん種に適応のある S-1 が用いられ、投与量は継続投与が可能量として 2, 10, 20 mg kg⁻¹ day⁻¹ が設定された。5 日間連続経口投与後 2 日間休薬を 1 クールとする 3 クール投与がなされ、3 クール投与終了後に有郭乳頭を含む舌を摘出して組織学的検討が行われた。コントロール群と S-1 投与群では味蕾数、味細胞数や各々の形態に有意な差は認めなかったが、PGP9.5 による免疫染色では味神経線維占有面積が S-1 投与群において有意に減少し、また舌内神経節細胞の変性率も有意に高くなっていたことから、S-1 投与による味覚障害には、味神経線維の傷害と舌内神経節細胞の傷害の関与を示唆する知見を得ている。舌内神経節の味覚伝導経路における役割は不明でありその解明が今後の課題であるが、抗がん剤による味覚障害の発生機序に関する基礎的研究はこれまで行われておらず、本研究で得られた成果は抗がん剤による治療法開発にも非常に有用であると考えられた。

参 考 論 文

1. Preoperative concurrent chemoradiotherapy for stages II–IV oral squamous cell carcinoma: a retrospective analysis and the future possibility of this treatment strategy.

Kirita T, Yamanaka Y, Imai Y, Yamakawa N, Aoki K, Nakagawa Y, Yagyuu T, Hasegawa M.

International Journal of Oral & Maxillofacial Surgery 41: 421–428, 2012

2. 口腔進展癌に対する CDGP+5-FU による超選択的動注化学放射線同時併用療法の検討

青木久美子, 舘林茂, 今井裕一郎, 山川延宏, 柳生貴裕, 梶原淳久, 中川裕之, 桐田忠昭

癌と化学療法 34(11): 1777–1781, 2007

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに腫瘍治療学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成 26 年 3 月 6 日

学位審査委員長

生体防御・修復医学

教 授 吉川 正英

学位審査副委員長

耳鼻咽喉・頭頸部機能制御医学

教 授 細井 裕司

学位審査委員

分子腫瘍病理学

教 授 國安 弘基

学位審査委員

口腔・顎顔面機能制御医学

教 授 桐田 忠昭

学位審査委員（指導教員）

分子腫瘍病理学

特任教授 高木 都